

惑星の未来を幻視するために  
—ゲーリー・スナイダーと日本、1951-2006  
山里勝己

1

ジョン・エルダーは、スナイダーの詩と生活における北アメリカ文化と仏教を中心とするアジア文化の融合は、われわれにひとつの希望を与えるものであると述べたことがある(45)。このようなクロスカルチュラルティはどのように生成され、どのようにスナイダーの詩や散文の中に表象されているのであろうか。本発表では、スナイダー初期の作品から、2006年までの作品を分析することで、詩人・思想家としてのスナイダーの成長を追いながら、その達成したものについて分析してみたい。その際に、「ゲーリー・スナイダー・イン・アジア」という本セッションの趣旨に即して、特にアジア的なペースペクティブに焦点を絞りながらその作品を検討する。

2

1950年代、日本に出発する前に、スナイダーは西部の原生林の中で仕事をし、その体験を基礎に詩集『神話と本文』(Myths and Texts, 1956)を書いた。原生林では、主にポンデローサ松が切り出されていたが、そこで働きながら、詩人は自らも荷担する生態系の破壊を記録した。

しかし、スナイダーの視点はこのような表層の破壊のみに留まるものではなく、『神話と本文』全体に一貫していることは(そしてスナイダーの主要作品の多くで共通して問われていることは)、人間と自然の関係性であり、「人間中心主義」にがんじがらめになって危機に瀕する文明の問題である。破壊されるウィルダネスは西部の詩人や作家をラディカルにする。自然に対する深い関心から政治批判を強め、今日のアメリカ環境運動の先駆者となったジョン・ミューアはその代表的な例である。同様に、スナイダーの作品に一貫するラディカリズムも、深層では詩人の10代後半から20代前半にかけての極西部での自然体験に支えられている。

1955年は、スナイダーが初めてカリフォルニアのシエラ・ネヴァダ山脈を体験した年である。ここでの体験から、初期の代表作とでも呼べるような作品が生まれてきた。例えば、『リップラップ』(Riprap)をみると、「パイユート・クリーク」(“Piute Creek”)、「火明かりでミルトンを読みながら」(“Milton by Firelight”)、「水」(“Water”)

などがヨセミテ体験に基づいて書かれた作品であり、「小さな枯れ枝を燃やしながら」(“ Burning the Small Dead”)は『奥の国』(*The Back Country*, 1968)に収められてはいるが、これもこの年のヨセミテ体験に根ざした作品である。

ヨセミテ奥地のウィルダネスは、若い詩人が人間と自然について深い洞察を得た場所であった。「小さな枯れ枝を燃やしながら」において、その語り手は枯れ枝を燃やしているのであるが、それはただの枯れ枝というよりは、語り手にとっては特別の意味を持つものである。つまり、それはシエラ・ネヴァダの自然の中で成長し、この宇宙の中に生きていた「生命」であったということである。存在の相互依存性、相互浸透性を教えるエコロジーや仏教に影響された視点もここには感じられるだろう。しかし、初期のスナイダーの詩と思想は、西部の大自然における直感的認識が、まずはなによりも先行しているように思われる。

### 3

このように見てくると、アメリカ極西部の大自然との遭遇やその中における体験に基礎をおき、文明や人間に関する新しいパラダイムを模索する若い詩人の姿が浮かび上がってくるはずである。だから、ヨセミテ体験に続く日本時代(1965-68)は、スナイダーが仏教やエコロジー、そしてアメリカ先住民文化を取り入れながら、人間と自然、あるいは文明について新しいパラダイムを模索しつつ思索をかさねた時代であったと言ってもよい。実際、1956年5月7日、日本に向かう太平洋上で、スナイダーはその日記に「塩-ケイソウ類-カイアシ類-ニシン-漁夫-われわれ、食べる」とエコロジーの公式を書きつけ、5月16日には「いったいぼくはこの食物連鎖のどこにいるのだ」と問いかける。(Earth 31-32)この点で言えば、日本時代はこの根本的な、しかし同時に新しい人間像をも示唆する、重要な問いと格闘した時代であった。そしてスナイダーは、このようなエコロジカルな問いかけ、あるいは存在論的な探求の中から詩を書いたのである。

スナイダーの「味わいの歌」(“The song of the Taste”)と題する作品は、詩集『波について』(*Regarding Wave*)に収録されたものである。この詩集は、スナイダーが京都での仏教研究を切り上げてアメリカに帰国する前後の作品を集めたものであり、このころからスナイダーのエコロジカルな生命観や人間観がより明確に表現されるようになった。特に、「味わいの歌」は、スナイダーの日本における仏教を中心とする「研究成果」の集大成とでも呼ぶべきものであろう。

この作品の主題は、食べること、すなわち、食物連鎖における「エネルギー

交換」であり、これは詩人のエコロジカルな世界観がはっきりと前景化された初めての作品である。この作品では食べる行為の主体者が限定されていない。すなわち、主語を明示しない詩法は、人間だけでなくすべての生き物が食べるという行為の主体であるということを示唆する。われわれはお互いを食べあっている、互いの種を食べ合っているとスナイダーは指摘する。このような世界では、循環するエネルギー交換のシステムからひとり人間だけが自由でいることはできない。しかし、そうだからと言って、自然界はかつてアルフレッド・テニスンが長編詩『イン・メモリアム』(*In Memoriam* 1850)で嘆いたように、「牙と爪を血まみれにして」争う19世紀的弱肉強食の世界でもない。また、宇宙はかつての欧米のナチュラリストたちが描いたような寒々としたものでもない。スナイダーにまでいたると、宇宙は其中で生きとし生けるものが幾重にも相互依存し合う、網の目のような(仏教の「インドラ網」の)世界として理解されるようになるのだ。

アメリカ先住民の言葉を借りれば、この世界は「命」という「贈り物を交換しあう祝宴」の様相を呈する。われわれが食物連鎖の網の目の中で生命を奪ったり与えたりするということは、じつは贈り物を交換し合うということであり、それは北米先住民の間に見られるポットラッチ、すなわち、他者に贈り物をする一種の祭典のようなものであるとスナイダーは指摘する。(Practice 19)したがって、このような宇宙では、食べるという行為はついにはひとつの儀式となり、個々の生命に対する深い畏敬の念に裏打ちされた大きな愛の行為となる。これが、1956年5月6日の自らの問いに対するスナイダーの答えである。

これまで見てきたように、スナイダーの作品にはアメリカ先住民の儀式や現代の生態学の成果が取り入れられている。その詩から見えてくるものは、「場所の詩学」または「場所の文学」を立ち上げようとしたスナイダーの先駆性であり、その東西文明にまたがるビジョンの壮大さであろう。スナイダーがその鋭い批判のまなざしを向けているのは近代工業文明の人間中心主義であり、この詩人は生態学と仏教を融合しつつ、近代文明の限界を越え、その行く末を幻視しようとしているのである。

#### 4

スナイダーの現代文学への貢献はどのようなものであろうか。ローレンス・ビュエルは「環境を志向する文学」の特徴として次の四つの要素を挙げている――

(1) ノンヒューマンは単なる背景ではなく、自然史と人間の歴史がふかく絡み合っているものとして描かれていること、(2) 人間の利益のみが唯一正当な利益として理解されていないこと、(3) 環境に対する人間の説明責任がテキストの倫理性の一部となっていること、(4) 環境を、恒常的なもの、あるいは所与のものとしてではなく、流動するプロセスとして示唆すること (78)。スナイダーはこのような要素を 20 世紀半ばから 21 世紀にかけて、もっともふかく表象した詩人のひとりであると評価することもできるだろう。あるいはこのような要素をもっとも先駆的に詩や散文に表現しようとしてきた書き手であると言うことも可能である。また、スナイダーをアメリカにおけるもっとも完全な「エコ・ポエト」であるとする最近の評価もある (Scigaj 271)。「エコ・ポエト」とは、先述の四要素を有する詩人を指すものと理解してもいい。

しかし、より具体的に言うならば、スナイダーの現代文学への貢献は、「場所の文学」の復権に果たしたその役割と、エコロジカルな思想と東西の智慧を融合しながら「場所の文学」のカッティング・エッジを示し、新しいアメリカ像あるいはアメリカ人像を提起したことにある。あるいは、『終わりなき山河』に見られるように、「場所の文学」が有するトランスナショナル（またはトランスカルチュラル）な可能性を示したこともその功績として挙げることができるだろう。しかし、なによりも、20 世紀から 21 世紀へと連続する環境危機の中で、環境へと向かう人間の想像力のありようを問い直し、「場所の文学」あるいは「環境を指向する文学」がヒューマンとノンヒューマンに関する力強い希望の文学であるということを示し得たところに、その最大の貢献があると言わねばならない。「場所の文学」は、究極的には、『終わりなき山河』(*Mountains and Rivers without End*) に見るように、「地球文学」とでも呼ぶべきスケールを獲得し、地球という惑星の未来を幻視する文学に変容しつつあると言うべきであろう。

(山里 267)

#### 引用文献

- Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard UP, 1995.
- Elder, John. *Imagining the Earth: Poetry and the Vision of Nature*. 2<sup>nd</sup> ed. U of Georgia P, 1996.

- Scigaj, Leonard M. *Sustainable Poetry: Four American Eco-poets*. Lexington: UP of Kentucky, 1999.
- Snyder, Gary. *The Back Country*. New York: New Directions, 1968.
- . *Earth House Hold: Technical Notes and Queries to Fellow Dharma Revolutionaries*. New York: New Directions, 1969.
- . *Myths and Texts*. Totem Press, 1960; New York: New Directions, 1978.
- . *The Practice of the Wild: Essays by Gary Snyder*. San Francisco: North Point Press, 1990.
- . *Regarding Wave*. New York: New Directions, 1970,
- . *Riprap*. Origin Press 1959; *Riprap and Cold Mountain Poems*. San Francisco: North Point Press, 1990.
- 山里勝己『場所を生きる—ゲーリー・スナイダーの世界 (*Poetics of Place: Reading Gary Snyder*)』. 山と溪谷社、2006.